大学放送実験番組における学習指導*

天城　勲　　阿部玄治
佐藤智雄　　奈須紀幸
平松圭子　　深谷昌志
矢部章彦　　小林靖雄
岡　行輔　　山本真一
田中正吾　　阿部美哉
若松　茂　　今川庄造

前書

放送教育開発センターが、昭和58年度９月から12月にかけて行った大学放送実験番組に伴なって実施したスクーリング及びチュータリングの経過報告をおこなったあとで、これに参加した主任講師から、自ら行った面接指導の実施状況について説明と質疑応答が行われ、討議に入った。これらを通じ、番組と活字媒体との相互補完性、社会人教育におけるスタディガイドの役割、あるいはスクーリングの意義と実施方法など大学放送教育が当面する諸問題の他、さらに将来予想される大学院の問題までも含めた、広範な話題について活発な議論が展開された。

各主任講師からの説明と質疑応答、ならびに討議の内容を以下に収録する。なお経過報告等については、別途報告書にまとめられる予定であるが、要約を本稿末に付記した。

１．スクーリング、チュータリングの実施状況について

(1)「学校教育」の場合

・実験番組での学習の動機づけの難しさ

（深谷）　おそらくどの先生方にも共通だと思うんですが、非常に困りましたのは、今度の場合単位をまだ出していないという状況でしたので、こちらが正直言って腰がふらついていたんですね。どこまで指導していいかがわからなかったんです。ですから大学が出来てから後のスクーリングと、単位を出せない今のスクーリングとでは、受講生も意味が違うだろうし、私どもも意味が違っていました。今度の結果はあまり参考にならないだろうというのが第一点だったんです。というのは、これがもしオブリゲーションを伴なう単位があるんだとしたら、われわれも言い方が違った様な気がします。

・レベルに応じたクラス分けを（学校の先生方からお母さん方間で）

（深谷）　それと、もう一点気づいたことは、私どもは、教育学でしたので、ふだんも色々な場所で、講演とか指導しておりますけれど、こんなにレベルの違った人に会ったのははじめてでございます、とにかく。大学のスタッフの先生方から主婦のお母さん方、そして学生さんから大学院生まで、校長さんまでおりまして。やる前までは、科目にスクーリングが対応して行けるだろうと思ったんですが、どうも無理なような気が致します。すべての人

達に対応させて行こうとするのは、5分もしないうちに無理だと思いました。ということは、お母さん方に向かってしゃべることと、学校の先生や校長さんにしゃべることとは違いますし、それからかなりキャリアを持っている社会人にしゃべることとも、レベルが違いすぎたのです。ですからどうも幾つかの教科群に分けて、その教科群毎にレベルに対応して、本人が自分は上級、自分は初級とか言っていただければいいのですが、そうした形のスクーリングをやって行かなければならないのかも知れません。おそらく教科によって違いが出てくるので一がいには言えないのですが、私どもが教育学の方で感じたことというのは、一斉に同じ形の授業をすることは、どの様な形であっても無理だということなんです。それはテキストを使う形にしても、ゼミ形式にしても、何にしても難しいでしょうね。ですから幾つかの教科を分けて、その教科群に対応して、出来たら3ランク位のランク付けをして、それでやっていただけると非常に有難いなという感じを持ったわけです。もう少し補足させていただきますと、学校教育でしたので、現職の先生がいらっしゃってもう勤めて何十年という方は、いまさら初級は要らないんですね。それからお母さん方にとっては学校の法規なんて話がそもそも面白いとおっしゃるし、それからかなりのインテリの方がおられて、その方はもう大半のことはご存知で、あとで議論するために来ていらっしゃるわけですね。ここまで来たならもう同じ話は無理で、おそらくこの傾向は本番、大学が開講した後も続くだろうという感じが致しました。

もう一点多少報告させていただくと、僕自身は実は学校の先生の現職教育を教育学では考えておりました。ということは、大きなことを言えば、ああいう教材を使って学校の先生方が現職教育していただきたい積もりだったんですが、しかし反応から言うとお母さん方の反応の方が多かったんです。多

分これはこれからもそうなるであろうと。で実は県の教育委員会などでも、「先生方このまま行くとお母さん方に負けてしまいますよ」という風に、お願いをしております。いいあんばいにとなりに県の教育センターが参りますので、とりあえず千葉県あたりでは県の教育委員会とタイアップして、田中先生達のジャンルと一緒にかなり現職教育として放送教育を使わしていただく方法はないかということを考えています。

（天城）　深谷さんが言ったのは、評価グループに分けるというよりも何というか、評価でも決められないことですね。

（深谷）　キャリアに応じてですね。

（天城）　とくに学校教育となると、片方はまあ言えばプロですね。それと家庭の主婦とはね。評価というのでなく、別の何かの属性で分けなければいけないですね。

（深谷）　本人達が、私はアマチュアだといっていただければ一番有難いですね。で、アマチュアの方が、私はプロだといったら、プロに入っていただければいいと思うんですけれども。本人が私はどのコースだといっていただければ助かると。そうしないとおそらく皆さんご不満になってお帰りになると思うんですね。キャリアのある人にとっては先ず内容がつまらないし、ごく初心者にとっては先ず内容が難し過ぎるし、それにしちゃあ時間が少しもったいないと、だから来なくなるという風になりそうだなという感じがしました。だから、ほかの方からもお話が出てくるのでしょうが、学校教育の問題なんか、わかったとかわからんとか言う前に、キャリアとか、まあ学校の先生を前提におくと随分ちがっちゃいますね。

（阿部）　今の深谷先生のお話しは、放送体系そのものまで変える必要があるんでしょうか、それとも先生のテレビの講義そのものは１本で行っても、

そういうふうな議論の場を別にすれば、もとは１つでスクーリングは３つに分かれるというお考えですか。

（深谷）　そうなんですね。結局映像としては１本で対応できるんですね。そこまではね。ところが目の前に受講生がいらっしゃるとごまかし切れなくなったわけですね。ということは、よく考えてみると映像もごまかしているんでしょう。（笑い）　映像の場合は何とかごまかしきれたと、いうことだと思います。

（小林）　実際問題としては、これから以後の本番で、学習センターを用いた時レベルを幾つかに分けてやることは大変でしょうね。ですからまあ考えられることとして、やれるかどうかは別として、あるセンターはプロ級の高級な所をやるとか、初級はどっかに集めるとか。初級の方が多いかも知れませんが、その時は２カ所にするとか、何かでもしないと実際はできないのではないでしょうかね。どこかの１カ所で３種類に分けて先生を頼んで何かやるというのは中々難しいでしょうね。やればそれが一番いいでしょうけど。その辺は検討しなければならないでしょうね。

（深谷）　ですから教育学全体としては比較的まあまとまりがありますので、今の阿部先生の質問に関連させますと、テキストや映像そのものとかラジオの方もある程度初級中級上級に分けようと思っているんです。でここは相当難しいですよと。で「学校教育」というのは正直いうと入門コースの積もりで作りますと。ですからお母さん方から評価がわりと良かったんではないかと思うんですね。そのかわりベテランの先生方からは今更という感じがあったかも知れません。

（小林）　ああそうか、本番では選択ができるから、それはきかなくてもよいという、ガイダンスで、プロの方はね。

（深谷）　逃げきろうかと思っております。もうおわかりでしょうと。（笑い）

（小林）　別コースをつくればよいでしょうね。

（深谷）　別コース、本番にはそれに近い、内容は違うにしても、何かあるんですよ。学校教育に関連するもので。

（矢部）　ですからね、そういうことからみると、放送大学に実際に入ってくる学生の母集団が全然見当がついていないんですね。片方では高卒のフレッシュマンか、それに近いグループ、それから後はいわゆる生涯教育としての高年齢者の中に入ってくるのでしょうけど。その中に２つあるんだなあやっぱり。他の何か大学なり高等教育を受けた人と、そうでなくて社会経験をなにか職業なんかを通して積んでいるけれども、ま、ですから高卒のフレッシュマンよりはある意味からいえば色々理解力も高いし意欲も高い。それが結局どっちにこう傾斜するかあけてみなければわからないが、どうも私の感じではやっぱり後段の方ですね。高校卒の人で、いわゆる普通の大学で考えている一般教養に類するような所へ目標をおいていると、これはとんでもない間違いになるような気がしますね。全科履修生がわりに少なくて科目履修生が多いということなんかも（受講生の放送大学への入学希望のアンケート調査から）、そういう特色がでているのではないでしょうか。

（若松）　社会人の場合は、大体科目履修生として入ってくるのではないかと思われるわけです、色々接触してみますと。しかも単位ということはあまり問題にしていない。要するに自分が学習を続けていくことに生甲斐を見出すというタイプです。従って先ほど深谷先生がおっしゃいました、単位が与えられていない実験放送では、両方、教える方も教えられる方も真剣味に欠けるという意見がございましたですね。それは案外そうではないのではない

かという感じを受けております。実際社会人はあまり単位にこだわらないといいますか、あくまで内容によるということになるのではないでしょうか。

（深谷）　こちらの方でですね、例えばこれが２単位、何であれですね、だとすれば、ここ迄どうしても学んでほしいとかいうように課題を出す根拠があるような気がするんですね。そこまで言えるだけの根拠が今年の僕にはなかったですね。そこまで例えば大人の社会人に向かって言ってよいのかどうか自信がなかったですね。ですからこれが実は、今仮に単位をあげておきまして、これが６０年になったら有効になりますよということが言えるといいと思ったんですが。駄目なんですね。今仮に出しておいて、先生方の単位が全部生きますと言えるといいんですけど。

（２）語学「中国語」の場合

・発音指導にあけくれ

（平松）　中国語の場合ですが、スクーリングは東京と神奈川に分けまして各３回ずつ行ったわけです。どちらも共通していえることは、表意文字というようなことと関連致しまして、先ず発音指導にとにかく明けくれたという感じでございます。参加者の中、東京の場合ですと、ほとんどが何らかの形で、ラジオなりテレビなり、ＮＨＫのですね、少し勉強したことがあるという人達が半分位おりました。それから全く初めてという人の感想をききますと、どうも私の講義はわからなかったようです、ラジオの。難し過ぎたという評判でした。少し習った方は、何かどっかできいたことをまとめていただいて有難かったという返答が戻って来ましたが。

個別指導の方は毎回3人位の方がお見えになったようでした。中に大変奇特な方がいらっしゃいまして、松戸か何かあちらの方でグループを作って勉強している方ですが、そのグループの中で、かつては中国帰りの人がいたのだけれども、その人がお年を召してどっか他へ移られたので、ＮＨＫの講座などをきいてわからない所があると、自分が代表して個別指導を受けに来ますから教えてほしいという、大変奇特な方が女性ですけれどもいらっしゃいました。個別指導はそういうわけで、人数は少ないんですけれども、喜ばれたんではないかと思います。

・クラスは２つ位に分けた方が

（平松）　それから、私一寸以外だったのですけれども、東京のスクーリングには、どうも東京の人はあまり来なかったんではないかと思うのです。千葉とか神奈川とか、中には栃木の方からいらした方もありました。それから申し込みが遅れてモニターになれなかったという方が、当日スクーリングを特別頼み込んで、きくだけきかしてくれということで参加した方が、3回とも出ていらしたというのも一寸意外だったんですけれども。スクーリングは、むしろそれだったら千葉あたりでやった方が良かったんではないかという感じが致しております。

それからクラス分けのことにつきましては、やはり全然はじめての方と、少しやったことのある人と、やはり2つ位に分けた方がスクーリングの場合良かったかとおもっております。

（天城）　語学は中国語とフランス語があったわけでしょう。両方とも同じような状況でしたか。

（若松）　両方ともクラス分けの必要性を当日先生方は感じておられた様です。

（天城）　クラス分けとそれから今の発音練習というか、その点は同じでしたか。

（若松）　フランス語IIは初級ではありませんが、発音練習のことはうかがっておりません。

（天城）　ラジオの場合には、受信機や場所の関係なんかがあって、短波の具合がわるいと聞こえないということがあったようですね。はじめての人や初級の人ですと、そちらから来る発音がわからないということもあるかも知れませんね。フランス語の場合はIIですか、中級ですか、それが一寸ちがうのですね。

（平松）　ある千葉の人の話しですと、わりとうまく入ったようです。家庭の主婦なんかとてもその時間にきいておれないそうですね。それでどこかに録音機をおいて、録音しておくそうです。それで自分の時間に暇ができてから自分で学習するという･･･。

（天城）　語学が中国語とフランス語とあったから、まあレベルが違ったんなら別ですれけども、これも似た所と違う所の反応があるんではないでしょうか。

・独学や自習では字に頼りがち、ヒヤリングをどう強化するか

（平松）　それと、まあ多少はやったことがある人達が半分位いたわけですけれども、例えば中国人の先生を呼んで来てごく簡単な質問をして答えさせるというようなことをしますと、答えられないんです。大体独学のせいか、

自習のせいか、字に頼ってしまっているんですね。ですから例えば放送大学の第2外国語とは言え、読み、書き、話すという語学学習の基本ということがらを考えますと、やはりヒアリングということをどうして強化するかということが放送の場合非常に問題になるんではないかと思います。

（天城）　語学の場合には、録音しておいてくり返しきくんだということがありましょうが、録音の問題はどうでしたかね。

（平松）　今回とくに便宜をはかっていただきまして、中国語の場合は作っていただけたんです。その利用についての感想は、アンケート調査を致しましたので、大塚先生の所に資料がまとまっているのではないかと思います。

（天城）　語学学習はくり返しが不可欠じゃないんですか。皆自分で録音しているんでしょうね。

（平松）　はいそうだと思います。

（天城）　それから受信機が悪くて録音してもだめだというので、もとのテープをほしいというのも今迄はあるんですね。

（平松）　スクーリングに参りました時に、何回目かをききそびれたので入れて貰えないかというんで、預かってそれを送ってあげたりしたこともございますけれども。

（深谷）　一寸オーバーみたいですが、15回分のカセットを先に作ってしまうこともあり得るのですか、将来のこととして。

（平松）　中国語の場合はですね、夏休みに吹きこましていただきましたので、15回分全部先に出来ていたわけです。

（深谷）　音もいいわけですね、それの方が。

（平松）　ええ、それでオリジナルテープをつくっていただきまして、それを学生さん達自由にコピーをとったんではないかと思います、積極的な方

は。

（ 岡 ）　深谷先生、授業は15週間にわたって行われるんですが、カセットは前もって備わっているのですね。ですから放送をきくより先にカセットで勉強することが可能なんですね。それを止めろとは言えないしね。

（天城）　持っているとなると、センターに来てカセットを録音させてくれということもある。

（矢部）　自由にとらせていいんですか。

（天城）　それはできない。一番の問題はセンターにおいてあるカセットを録音させてくれということですよ。著作権の問題その他そっちから来る問題でしょう、熱心な人はどうしてもやりたいでしょうし。

（平松）　一寸私個人的な感想ですけれども、あの私自身最近一寸興味を持ってＮＨＫのラジオ大学講座とか市民講座をききますね。それだけを真剣にきくということはしませんから、やはり何かをしながらきいておりますから、例えば、同じものを何回きいてもその都度新しいことがありますですね。ですから、著作権その他のことがあるかもしれませんが、受講生であれば自由にできるだけ、そういうチャンスを与えてあげた方がよいのではないかと思いますが。

（天城）　方向はそうですけれど。

(3) 「マスコミュニケーション論」の場合

・スクーリングでは補講的な役割も

（佐藤）　私の一番最初の問題点は、スクーリングはやはりこういう大学の

場合は是非必要で、やっていただきたいことを最初に申し上げたんですが、やはりやって非常に良かったという気が致します。先程の深谷先生のご意見とは一寸反対になるかと思うのでございますが、これはまあ科目の性格が違いますから、おそらく当然のことだと思うのです。ただ、後程申し上げますが、やはりいくらかレベル分けをした方が良いのではないかという問題も残っております。その点は深谷先生のご意見に若干近づいてまいりますけれども。

テキストを使いまして、5回分を第1回、6回から10回迄の5章を第2回、それ以後15章迄を第3回とやりましたが、テレビでしゃべりましたのは1回1回が読み切り講談式になっておりまして、むろんそうしませんと番組が成り立ちませんので、従って独立した章を5週間連続してみているわけですね。その間の横の流れというものを受講生が把握しているかどうかという点が、これが一番問題点だと思いました。従って私のスクーリングの基本的な態度は、独立した章を流れている筋、論理の筋と事実関係の筋を受講生に先ず教える。2番目には各章毎のどこが一番重要かを飛石的に指摘しながら、問題点を明瞭に浮きぼりにして行くこと、これが私のねらいだったわけです。ところが実際にスクーリングをやっております間に、受講生の方から質問が出まして、その質問というのは、先生のテキストにないことをテレビではおっしゃったではありませんかということなんですね。これはまあ、そのことは決して悪いんではないと私は思っております。テキストには何といっても枚数に制限がございますので、書き切れないことがございます。それをまあテレビを見ている諸君には理解していただきたいと思って、わざわざパターン化しながら、この部分はテキストには無いといったこともございますし、いわないでテキストに書いてある話の中で述べたりしたこともございます

が、そこを目敏く受講生が指摘しましてね。第何回目のこの問題を扱った時のパターンの中に、ジャーナリズムの意義でしたかね、ジャーナリズムの何々について、先生は5つに分けて箇条書きにしたんだけれども、それをもう一ぺん黒板に書いてくれといわれましてね、書いたことがございましたよ。そこで、テレビ番組の中で、テキストに書いてない部分で諸君の記憶に残っていてわからないこと、つまり筆記をすることが出来なかったことについては黒板に書きましょうと、台本を全部もって参りましてね。そうしましたら、次々と台本についてテキストにない部分の要求が出て参るんですね。そこの所あそこの所の図表がわからないから書いてくれというんで。私全部台本に残してありますから書いたんですけれども、非常に満足してくれました。これを見ながら私考えたんですけれども、理想的に申しますと、今のカセットの問題と同じでございましてね。やはり受講生の皆さん達はあらかじめカセットテープ、ＶＴＲを用意していただくと、その点は非常に良いのですけれども、そこ迄は大学として受講生に要求するわけに参りませんので、スクーリングでやはり補っていかざるを当分は得ないだろうと考えます。しかしそれにもかかわらず、テキストに書かれてなかったことを映像の中でしゃべることはやはり必要であると考えまして、それをこの補足する意味もですね、スクーリングはこの補講的な役割を持っているんではないかというのが第1点でございます。

・円卓方式でなごやかな討論を

（佐藤）　第２点は、これは私、こちらに参りました第１回の時に、講師控室を用意していただかないと困るではありませんかと、大変失礼なことを申

し上げたんです。実はあの時、講師控室がございませんで、教室の中で教壇の脇に椅子を持って行って時間が来るまで過ごしたんですけれども、何としても講師としての体面も維持できませんし、体裁も非常に悪いようでございます。第２回目は、お願いしてございましたものですから、ちゃんと別室を用意していただきまして、そこに湯茶の用意までしていただいてございましたが、あれが非常に有効でございましてね。あの休憩時間にざざあっと皆私について控室に来るんでございますよ。あの小さな部屋で皆車座になりましてね、色々話がでて参りましてね。先程おっしゃった円卓方式で討論が必要だというご意見、もう私の体験の中でもって全くその通りだと思いました。それでまあもうそろそろはじめないと時間がなくなりますから、これはじゃあこれだけにして、あとは講義が終わってから、私は帰りが遅くなってもかまわないんだから、このあととくに予定がないんだから教室で承りましょう、という具合に、10分の休憩が20分位になりまして（笑い）、非常になごやかだったのです。まあ向うにしますと、私にとっては初対面だったのですが、2回目は2度目だったのですが、5回なり10回なりテレビでこちらの顔を見て覚えているものですから、非常にその親しみを感じてくれていましてね、話が非常になごやかに行きました。そういうことがございましたので、短い時間ですけれども、やり方を工夫する必要があるのではないかと考えました。

つまりずつと、先程申し上げましたように筋を追いながら、それから大事な所をピックアップしながら、説明を重複させて行いながら、しかもなおそこで、質問ありませんかと、あるいはご意見ありませんかと。私は質問ないかとは申しませんで、私の意見に反対の諸君があったらどうぞおっしゃってくださいと問題を投げかけました。質問もあれば自分の意見を言う人もござ

いますので、それを手際よく処理しながら、あなたは2度目だから一寸待ってください、はい他の方、というようにやって参りました。段々なれて来ましたらそれがうまく行きまして、その代りおしまいの時間が５時に終わるのが５時15分になったり致しましたけれども。私自身は15分や30分後れても平気ですが、大学にご迷惑をかけない程度に、討論して参りますと、非常にニーズを満せるのではないかということを感じました。

これはまあ、休憩室を設けていただきたいことと同時に、そういうことが、そういう場が、空間が、やはり教育効果の上でも有効ではないかということでございます。

・スクーリング出席者の答案（通信指導の）は良く出来ている

（佐藤）　それから出席した学生は、通信指導、私は記述式でございますが、やはり良く出来ているんでございますね。出席したかどうかという所に丸をつける欄がございまして、出席している人の答案は非常によく出来ていることは申し上げられます。こういう意味からしましても、スクーリングの意義は、教育効果を含めてあるのではないかと私自身感じております。

・レベル分けの配慮を

（佐藤）　レベル分けの問題では深谷先生のご意見に近づくわけですけれども、ジャーナリストはおりませんでしたが、投書好きの人はおりまして、朝日新聞にしょっちゅう投書しており、投書が縁で朝日新聞のある編集委員の方とも懇意になっている人ですが、先生そこの所がうかがいたいんだがと、

講義の途中に質問が出て参りました。あまり頻繁に質問して、全体の進度に影響してはいけないので、そこのところを注意してあまりディスターブしないようにして発言を許しましたが、彼は自分の専門的知識を披露することが出来ましたので、非常に満足しておりました。（笑い）将来、高校を出たばかりの諸君や、家庭の奥さんとは一寸レベルを変えないといけないと思います。知的な職業に従事しながらマスコミに対し若干の予備知識を持っている、或は将来ジャーナリストにでもなろうと考えている若い諸君のような人達があった場合には、やはり専門のレベルでやらないと満足しないのではないでしょうか。私のような一般的な科目についても、受講生の質においてはレベル分けの必要が将来でては来ないかということを感じております。

（阿部）　先生のグループの中に社会教育の方で、長年にわたって集団学習をやっているグループの方々に、指導を受けていただくようにお願いしまして入ってもらっんです。青木さんという荒川区の社会指導主事の方と10人程のグループですが、とくにそういうグループが中に入っていたということは、あまりお気付きになりませんでしたでしょうか。

（佐藤）　あまり耳にはいたしませんでした。

（阿部）　ディスターブとかそういうことはございませんでしたか。

（佐藤）　はい。

（若松）　そのグループの人達の話をききますと、先生のスクーリングは非常に皆さん良かったという感想で、とくに先生は別人のようだといっておりました、テレビとは。（笑い）

（佐藤）　ああそうですか、テレビではやっぱりポーカーフェースという感じになりますが、教室では生地が出ますから。（笑い）

（小林）

大学の本番では当然学習センター毎に再視聴の機能を持っていまして、ビデオは全部見られるようになってますから、学生がもし面接授業前にもう一度見たければみれるというわけです。控室などももちろんあるんですね？

（ 岡 ）　あります。

（小林）　時間が終って、終りというんではなくて。

（ 岡 ）　講師控室もありますし、それからまあ学生同志が話し合う場所もあります。

（4）「地球と宇宙」の場合

・少ない受講生に全力投球

・スクーリングには間投詞を

（奈須）　小尾先生と組みになりまして、地球と宇宙という番組で、群馬と埼玉で３回ずつ実施致しました。はじめからスクーリングというのは大変大事だという意識を持っておりましたので、まあ私なりに全力投球した積もりでございまして、結果的に大変良かったと思っております。ただ全力投球するものですから、体が３時間持ちませんでしたね。２時間15分位でもうくたびれ果ててしまいまして。（笑い）

これはここでやりましたシンポジュウムでも出たのですが、実際に大学で授業を致します場合は、間にいろいろなこの先生の内緒話や経験談とかそういうものが入りながら、そこに学生がいておやりになる。ところがテレビの場合は極めて真面目にやらなければいけないわけですね。そういう意味での間投詞をいれるわけにいかないわけで、非常にこう稠密な内容になっており

ますでしょう。ところが実際に大学でやっている場合には、その間に色々な話が入っているわけですね。ですからそれも考えますと、やっぱりこれをやれるのはスクーリングであると、あまりテレビなんかでは公表できないような内輪話など、そういうものをスクーリングの場に持ち込んでやった方が良いだろうと思いまして、第２回目、私にとって１回目に当ります時に、殆ど全部、私がどうしてこういう学問を志して、どういうことをやって来たかをほぼ３時間近く、もちろん最初彼等との自己紹介の話はあったのですが、致しまして、少し学問というものに対しての、何といいますか、情熱なり、構え、対応の仕方なりそういうものを吸みとって貰いたい、それには私がどのように学問に対して苦労して来たかを話をするのも効果があるのではないかと思いまして、そういう話を致しました。そして第３回目は、テキストブックとかテレビの話の内容とは若干オーバラップしている部分もありますけど、殆ど違った内容の話を致しました。私なんかの専門の地球科学の中で、文化といってよいのでしょうかね。文化とか人間生活に関係の深い部分というのが沢山あるのですね。そういう話題を取り出しまして、色々と話をしたわけです。例えて申し上げますなら、自然科学で氷河による海水準の変動という現象がありますが、海面が上がったり下がったりすると、一体それでどういうことがあったんだろうか。人類の文明というのは5000年前まではよいが、その前の状況はよくわからない。ちょうど海面が現在のレベルに達したのが、5000年前で、その後安定していることと何か一致している。これは偶然かどうかと、そういう問題を取り上げまして、その辺から色々な海図の問題、海洋航路なんかの話なんかも致しまして、あっという間に2時間以上3時間近く経ってしまいました。ですからこれは、最初（2回目）５名、３回目は６名と１人増えましたですね。それから埼玉の方ではやはり同じように話し

てきましたが、こちらは最初（２回目）10名、３回目に９名で、どうも埼玉の方に集まった方の方が平均しますとレベルが高い、で群馬の方が少しバックグランドのレンジが広いという感じを受けました。

大体私、大学の講義でも学生を寝かすというのは恥だと心得ておりますので（笑い）、１人も寝かさないという努力をしているわけで、今回も１人も居眠りをしている人はいなかった、そこ迄持って行かなければうそだと思っているものですからね。非常に私なりにいつもと同じように全力投球したつもりでおります。

やはり、テスキトとテレビとスクーリング、この3つは必要だと今回の経験を通じまして感じました。放送大学では、大学という名がつく以上、単にテレビというメディアで済ませるのではなく、集まってフェイスツーフェイスで面と向いながら話し合うということ、そういう場を持つということが必要なことだと、今度のスクーリングを通じて感じました。何を話したかということは全部メモに書いてございます。

（若松）　何か問題点というかご指摘をいただく様なことはございませんでしょうか。

（奈須）　ございません。ただ先日も一寸申し上げたんですが、わざわざこちらから事務の方が来ていただきまして親切に、また群馬大学、埼玉大学の事務の人達も、わざわざ日曜日に出勤して、丁寧によくやっていただきましたが、何ぶん案内の立て札が少な過ぎましたね。やって来た学生さん達が、一体どこへ行ったらよいのか、あの広い大学の構内で。あれはやはり10本位目で見える程度の所に、次はどこへ行くのかという、そして会場にたどりつくというアレンジメントは、次からやっていただいた方が良いと…。

（若松）　学生が先生を囲む様な形でおやりになったんでしょうか。

（奈須）　いいえ、私が教壇の上から、とは言っても度々教壇の前に出て来ましたけれども、円卓形式ではなくいたしました。それから大体ですね、集中講義なんかいきますと、よく前の方に３列位いて、後の方にずっと７列位固まっているケースが多いですね。ところが今回は皆前の方にはじめから固まっているのですよ。だからやっぱり意気込みが違うなと、来ている人のね、それを感じましたね。

（天城）　今度は東京はなかったのですね。

（奈須）　群馬と埼玉だけです。

（天城）　受講生の属性はどう違いますか。

（奈須）　埼玉の場合は、田園都市線というか、東京から越えて来ている方が大分多いのですよ。またご夫婦で、ご主人が建築屋で奥さんが子供離れをしていて、夫婦で見ているとか。それから埼玉の場合人数が倍ございまして、10名と５名では一寸雰囲気が違いますね、教室の雰囲気が。何となく賑わった雰囲気が10名の場合ですと出て来るわけです。

（天城）　教員が多かったんではないですか。

（奈須）　群馬ですか。

そんなことございません、色々な非常にレンジの広い…。

（小林）　先生の場合、スライドやなんかお使いになったんではないですか。

（奈須）　いいえ話しだけです、今回の場合は。スライドを使うことをやって見たいと思っておりますが。

（天城）　奈須先生の場合は、話が豊富だし、皆を退屈させないように話がうまいですからね。

（奈須）　本当に全力投球しましたです、すべきだと思いました。ただし疲

れましたね。途中で10分位休みを入れましたが、私だけにコーヒーを入れてくれるのでなく、受講生の方にもコーヒーが入りまして、非常に皆喜んでいましたね。

（小林）　うちの事務長予定者が行っているんですか、群馬には。将来センターの事務長になるのですから一生懸命にやってくれているのだろうと思いますけど。

（奈須）　こちらのセンターからお出になった方も非常によくやっていただき、いいコンビでした。日曜日にもかかわらずですね、ちょっと感激致しました。

(5)「衣生活概論」の場合

・やっぱりあの先生！

（矢部）　驚いたことには、お茶の水の私のいた家政学部の被服学科の卒業生が３人、（笑い）一番古い人は20年位前、もう１人は10年位前もう１人は３年位前、私はわざとしらん顔をしていました。結局問わず語りに、あと色々な感想をきいてみると、３人とも彼女たちは私の自然科学系をやっているわけです。それが生活の中の衣服というので、先生がどういうとらえ方をして、それを融合しようとしていらっしゃるか、ということに興味があったから聞きたい、と面接にも３回ともフルに出ているのですね。それ以外にも高学歴で国文科を出たとか、英文科をでたとか、女子大で国文学をやっていて、家政学なんか学問でないと思っていたが、実際家庭に入って衣食住の生活をやると、逆に自分は何か空な学問をしていたような感じになって、そう

いう所であの講義をきくと、本当に身にしみてためになったという感想もききました。中には、旧制の女学校だけの人で、大学は恐ろしくて、試験をされると思うとこわくてならなかったのだけれども、やさしく先生が話しかけて下さって、質問に答えて下さって、これなら放送大学でも私はやれそうだというような感想もききました。それから先程からお話が出ていましたけれども、ああやっぱりあの先生だ、というわけです。テレビで15回見ている先生が画面から抜け出して来たという親近感が確かにございました。

（若松）　先生はずっと円卓式でおやりになりましたね。

（矢部）　はい。最初から私は円卓式にして、皆にわりと自由にしゃべらせました。第１回の小池さんの話の時には、少し補いの話をしたいということで、質問を受けて服装史に類することで、色々な材料を用意して話しをし、半分位の時間をかけました。ことに第１回目の時には、皆さん放送大学というものに関心が高く、概要を知りたいと言うことで、その日の後半はかなり質問が集中したようです。

そういうことですから、個々の内容についての質問は少なかった。また、通信指導の課題については、最終の集計が出ていないので今日はお話し合いできないのですが、試験を受けることで、おさらいをする機会ができたが、試験はつらいけれども大変知識をまとめる上でためになるという感想もございました。

・面接授業では応用面の橋渡しも

（矢部）　それから、千葉で看護学院の先生をしている方が、私の所へチュータリングに見えたのですが、この方は、はじめは、講義についての質疑

を、20~30分やりましたが、そのうち、私はこういうことをやりたいと言った専門なりに疑問に思っていることの話になってきました。例えば赤ん坊のおむつの話になって、家政学の旧い教授でおむつ博士といって、九大の円城寺先生の所でおむつで学位を取った方のことを話すと、その研究報告はどこにありますか、これこれの所にあります、そういうものをもとにして研究をはじめたい、等々。授業のほかに衣生活にからんだ問題について、研究上の橋渡しや適当な先生を紹介するなどのことがスクーリングの特色と思います。学生の中にも色々な専門家がおられるが、問題意識を持って問題に立ち向かって行く時には、やはり独学より、指導者を持った方が遙かによいのではないかなど、学び方についても１時間余り話をして行きました。この例などスクーリングの具体的な１つのお手本となるように思いました。

・学生の反応を大切に慕い

（矢部）　学習指導については以上でございますが、今日皆さんから教えていただきたいのはことがあります。私自身の授業の内容もそうですが、一般的に言って講義内容のよい意味でのチェックについてであります。今までの大学の講義は、マイクを使って何百人に講義をなさるにしても、いわば密室で行われ、その内容についての批判はなかった。これからの放送も私は本質的には従来のものと違いはないと思いますけれども。しかしやっぱり公共の電波に乗るとなれば、そこに色々の問題のあることが、この頃ようやくわかりかけてきました。学生の反応については忠実に考えて行く必要はありますけれど、一般の評判を一々気にしてはいられないという気もします。しかし、現実にはそれにいくらか拘束されるわけですし、自分だけの問題ではな

く、私の属する生活科学のとらえ方に対する外の反応などは多いに気になると思います。「お前さんの講義少しおかしいよ」とか、「もう少しレベルを上げたらよい」などとは、仲間にだって、とても言えないでしょう。

・放送大学の「教養」とは

（矢部）　ことに教養ということ自身すでにわからないのですけれども。放送大学のねらっている大学のレベルで、教養という名のものが、今までの既存の大学でのそれとはどう違って、どういう形であるべきかということが、これからの重要な課題になるでしょう。これはそう簡単に結論が出ることでもありません。少なくとも今の放送大学のいう教養という名にふさわしい講義の組立てとはどういうものであるか、今までの総合大学の基準の講義の切り売りでよいのか、いやそれでは困ると言うのならどうすればよいのか。ともかく絶対の基準があるわけではないのですから、いろいろの失敗の歴史の中から、5年なり10年なり経った後に、だんだん磨き上げられて良いものが出て来るように思いますけれども。やはり差し当たり一番気にかかり出して来たことであります。御教示や勇気づけられるヒントを頂ければ有難いのですが。

(6) 「歴史の理論」の場合

・通信指導のレベルのよい受講生がスクーリングに

（阿部玄次）　歴史の理論のスクーリングは1回目25人、2回目16人、3回目

が13人という具合になっております。3回通じて出て来ている人は8人、2回つづけたのは8人。千葉地区だけでなく、東京あたりから随分沢山来ていました。手元に全部のはないのですが、千葉地区の中で学歴のわかるものは、大体半分は大学卒でした。

第1回目の通信指導の点数を見たのですが、第1回目のスクーリング25人の中で8割以上の点をとっている人が23人、大体レベルのいい人がスクーリングに出て来るということになるようです。

・ラジオ科目のスクーリングでは、「見るもの」が良い

（阿部玄次）　スクーリングは藤田先生と一緒にやって、僕は藤田先生のやっているのを見ていたわけですけれど。（笑い）テーブル方式がよいということで、第1回目は、どういう積りでこれをきいたかと、1人ずつ自己紹介して、皆で25人いましたから、話をするとほぼそれで第1回目は終っちゃったですね。僕は歴史のスライドを少し持っていましたから、ヘロドトスやツキディデスの歴史の話と関連させギリシャ・ローマ当りのスライドをみせましたが、それは皆さん興味があって…。

第2回目はルネッサンスの話が出て来ましたので、フイレンツェなどのスライドを持って行ったんですが、その時は遅くなっていたんですが、用意してあったら見たいというので、大分おそくまでスライドを見せたのです。ラジオでは「見るもの」ですね。スライドなんかいいようですね。最後には（第3回目）、藤田先生がスライドを沢山持っていらして、ヨーロッパ1周のスライドを見せて、皆で楽しくしゃべり合うようなことで、楽しくやれたわけですね。

・講義をしてくれた先生に直接会いたい

（阿部玄次）　それから来る人にすれば、講義をしてくれた先生とですね、そういう人と直接合って話をしたいということのようですね。ことにラジオだと耳からきくだけですから。僕の声なんか声が悪いから碌な奴でないだろうと思って来たんじゃないかと思うんです。或はもっと良いと思って来たのかそれはわからないけれども。（笑い）とにかくなにか声の印象とは違うといって帰っていったですけれども。まあスクーリングをするということはやっぱり喜んでいましたね。

・講義とテキストはあまり重複しないよう

（阿部玄次）　話をしている中で、テキストと重複しないようにしてほしいという意見もあったんです。まあ全く重複しなかったらテキストの意味がありませんので、或程度ずれた方がよいだろうとは思うんですが。

チュートリアルとしては4人来まして、その中2人は、偶々ここへ再視聴に来ていた人に話をしたのですが、あとの女高師を出た人というのは、藤田先生にお会いしたくて来た人ではないかと思うのですが、ヴィコのことで参考書があったらというようなことを話したのです。もう1人は新聞記者で、中央大学を出て、経済新聞かなにかの記者ですけれども、キリスト誕生紀元の話を一寸して、キリストの誕生を2、3年間違って計算してしまったとか、ソ連ではキリストは実存しない神話上の人物だとか、それでキリスト非実在というようなことをいったですね。僕は2、3年間違おうが、神話上で実存しなかろうと、物指しとして間に合えば何でも良いのではないかといったのです

が。（笑い）この人は歴史の理論ということで、歴史に興味を持って来たんだけど歴史哲学の方が沢山になっていて、その点では歴史にもう少し比重がある方がよかったというようなことを言いましたね。一方スクーリングに参加して、ずっと昭島から来ていた、自衛隊か何かを退職して自営やっている人は、哲学に興味を持っていて、次回は哲学の講義をきくんだとメモを持って帰りました。そんな所ですね。

2．討議

・番組とテキストとスクーリングとの組み合わせ

・番組と活字媒体との役割分担は

（天城）　将来の問題として先生方におききしたいことは、テレビでもラジオでも、講義のプレゼンテーションとテキストとがイコールであるかどうか、まあ20%位ずれているという話をうかがいましたが、そういうことをおやりになって、それからスクーリングをおやりになって、要するに番組とテキストとスクーリングの間の関連について、もっとこうやったらいいのではないかというご意見があったらうかがいたいのです。今の実験番組でやっているテキストというのは、テキストという建前では作っていなくて、1つの活字媒体でしかない。

従って体裁も先生方の考え方によって、色々のものがございますね。放送大学の方では印刷教材という名にするんだろうと思いますが、大体100頁位のものにするようです。私個人も今迄色々な話をきくなり、ディスタント・エデュケーションなどの実例を見たりいたしますと、番組と活字媒体の相互

関係、どういうものを活字媒体に入れるか、一方放送番組即ち音声なり映像には何を入れるか、まずその分け方の問題があるでしょう。それに、1本のテキストでいったい出来るのか、どうしてもスタディガイドが必要だとか、またものによればリーディングスないしアンソロジーまで用意した方がよいのか、その辺の所を今後考えて行く必要があるのではないかと思うのです。それとスクーリング、放送大学の科目の中には、スクーリングが必須になっているものと、なっていないものとがあるわけですね。必須になってないものは、一寸まだよくわからないのですけれども、スクーリングだけで1単位加わることになっていて、スクーリングに出なかった場合には1単位落ちるだけで、番組とテキストだけでしょう。そうすると、何か今のお話のように、スクーリングの非常に大きな意義をおやりになった皆さん方が認めているのに、どうも切り離してしまって、スクーリングが加わってはじめてワンセットの単位になる考え方でないですね。そういうことになって来た場合に、メディアとしては音声、映像の番組と、活字媒体と、スクーリングの組合せからいって、何かご提案がないでしょうか。そこを伺えるとよいのですが。

（小林）　最低の20単位は、これはペアになるわけです。

（天城）　それは卒業の場合でしょう。科目履修の場合もありますからね、その場合はばらばらになるんですね。

（小林）　ええ、あの全科履修生の場合、途中の通信指導と試験をやって単位をとって、 124単位で卒業するわけで、その場合20単位の面接授業の単位が入っていますが、そうでない学生の場合…。全体として、スクーリングのおき方が問題ですね。

（ 岡 ）　特論というのが4単位あって、それは独立していますから残り16

単位しかないわけですね。

・学習センターの機能は

・仲間同志のフェイスツーフェイスも

（天城）　それともう1つは、学習センターを原則としてオープンにしておいて、そこに、さっき言ったように再視聴に来るとか、或は参考書を読みに来るとか、そういうものと、それから先生がいての、スクーリングといわれている一種の面接授業と、一寸ちがうわけですね。そこに、チューターの人が普段いれば、一種の学習相談をするとか、或はチュータリング、もっと広い意味のチュータリングをするということと、今それも含めて色々のことを試しているわけです。ですから面接授業とか、テレ・カウンセリングだとか、チュートリアルとか、色々な方法で試行をやっているわけです。学習センターの機能から見た場合に、スクーリングということだけでなしに、もっと別のそれぞれのメディアが持っている意味、限界、あるいはその多様性というものを議論したいのですが。

（佐藤）　まあ私はマスコミュニケーションの専門家というとおかしいのですが、つまり映像でしか絶対に表せないものと、活字でしか表せない、映像にかからないものがあるんですね。これをテキストと放送番組との両者お互いに相互依存的な関係の中で、もしそれをインテグラルに統合するものがあるとすれば、それがスクーリングではないだろうかというように考えます。時間が短ければ短いように、そこは教師としての能力の問題ですから、短い時間の中でもインテグラルな或る総括を与えて、受講生の理解を促進できるという形で、やはり回数は少なくとも、スクーリングには、回数が少なけれ

ば少ないように、今のような意味を与えていただければ有難いと思いますですね。まあ円卓方式ですと出来ませんが、講義式ですと私たちの私立大学では大きな教室でやっていますから。番組で言えないようなことでも…、ここでぐっと引きつけて教師との間の信頼関係を作ることも出来ますし。回数に関係なく、スクーリングの重要性だけは是非一つご認識いただきたいと思うのですが。

（天城）　そうだろうと思うんです。今のご計画のように形式的にスクーリングの単位を分けてしまいますと、放送大学の全体の中で、マイナーなものになってしまいますね。だけど学習センターというものは1週間オープンしておきますと、別な意味で、この今予定されているスクーリングという意味ではなくて、学生が来られる、その機能は何かという問題ですね。

（小林）　参考書その他文献の学習と、もう1つは今のチュータリングなんですが、それに対しての人員の対応が非常に少ない、この点がね。講義のある先生なんかの指導はその場で出来るんですが、センターではまだやれないということがございましてね。これが大きいなやみなんです。非常勤の専門家を依頼して、電話で連絡をとって、どっかで会う、センターで会うというようなことが出来るといいんでしょうがね。これは中々難しいでしょうね。

（天城）　今回のテレ・カウンセリングというのは、カウンセリングではなくて、さぼる人達に促進したわけですよ。（笑い）実はそっちの役だったんです、今度の場合は。

（小林）　ＯＵみたいに、ものすごくセットアップされて、5千人もチューターがいてというようなことは一寸出来ないですね。

・仲間同志のフェイスツーフェイスも

（矢部）　それからもうひとつ、話が出ましたが、たまたま自己紹介していたら、私は長年友の会の運動をしていまして、という人がいて、後の休憩時間が済んで行ったら、この中に友の会の人を3人発見しましたとか、色々聞いてみると、似たような問題とか似たような環境で一緒に勉強したり、試験を受けるというような時に山をかけたりするような仲間がほしい…。

（小林）　学習グループみたいな。

（矢部）　先生との出会いだけでなしに、どういう人が受講生にいるかということも、大変興味があるので、このスクーリングに出て来たという感想の人もいました。

（若松）　それなら円卓式がお互いに知り合うのによろしいわけですね。先生は30人を、かなりの人数ですが、円卓式でおやりになってどのようでしたか。

（矢部）　かまいませんよ、それ位の人数だったら。

（天城）　これは先生とのフェースツーフェースの機会ということが非常に大きいかも知れませんが、今おっしゃったように仲間同志でもフェースツーフェースの機会になりますね。韓国で放送大学をやる時に、学生会を作らせないということを強力にやったんですね。学生自治会みたいになったら大変だと、それを厳重に禁止したのに、裏でインフォーマルなものが出来てしまった。自然発生的にどうしてもこういうグループ、つきあいのグループが出来るんですね。学生運動のようなものも起き得るんですよ。そうするとセンターというのはその場所になるんです。ですからこれもかなり大きな問題だと思います。

（矢部）　必ずしも無邪気には受け取れないわけですか。

（天城）　韓国では学生運動を心配しているんですね。そこで集まることを

禁止したわけです。放送大学に学生自治会を作らせなかったのだが、それが自然発生的に出来てしまったんですね。

そんなことがあるものですから、今度の場合もそういうグループというものも、学習センターを中心に出来てくるでしょう。チューターの仕事になりますがね。そうするとチューターに対するガイダンスを放送大学としてやらなければならないですね。

・1冊の印刷教材でよいか

私はかなりテキストのウェートを重くみているんですが、活字でなきゃ表せないものと、活字の方がベターのものがある。ですからＮＨＫの市民大学でも、いい講座だと思ってもノートをとろうと思ってもとれませんね、数字的なことは。番組としての限界がありますから、パターンなんかとてもうつせませんしね。そういうものはもうむしろ後の学習のためにはテキストにのせる、所がそういうものを入れてしまうと、テキストが非常に厚くなってしまう。そうなると1冊の印刷教材でよいのか、スタディガイドとか、レファレンスとか、リーディングスとか色々の種類のものが問題として出て来ている、科目によっても違う、そこを検討しなければならないと思います。

・補助教材を

（小林）　そういう話がちょうど放送大学の方で今日も出て来ていました。そこで補助教材的なものとか、学習ガイド的なものとか、そういうものが印刷教材が約100頁にかぎられると、是非必要になる。またこれが補助教材的

なものなら無料になるかもしれませんが、別冊になってくると予算にしばられて問題になります。まあ参考書は推薦して、買って貰ってもよいと思うんですが。色々の補助教材は、どうもやっぱり無料にしなければいけないような気もするんです。そこらが問題になっているところです。

（平松）　今度100頁位のものになるんですか。

（小林）　一応基準がですね、すり上がりの。

（平松）　そうすると随分減りますね、50頁近く減りますね。今度は中級というか入門編の上を書かなければならないわけですが、それ早速 100頁位のものにしなくちゃならないわけですね。

（小林）　本当の中身だけですね、目次とか参考文献とかをのぞいて。

（佐藤）　しかし補助教材を作る位でしたら、本テキストをもっと厚くしていただいた方が私はよいと思うんですけどね。図とか表とかを随分あの禁欲しているんですよ、私の所は、それを入れさせていただければ･･･。それでも私16枚では書けませんで、ほとんど20枚になっているんですね。

（若松）　例えば通信指導に記述式がございますね。受講生がどの程度まで書いたらよいかそのレベルがわからないというのです。スクーリングに出ておれば、或程度指導をしていただけるのでしょうけれども。ですからスクーリングに出られない受講生にとりましては、いわゆるスタディガイドと申しますか、最低どこまでかの到達レベルあるいは目標を示すことも是非必要なのでしょうね。これらはＯＵのテキストにははっきり書いてありますね。

（天城）　それから例えば、はじめから全部色々な人の著作から部分的に抜いて来たもののアンソロジーがあります。どうしても先生方によって見方が違って来ると、すべての方のテキストを１つのタイプに強制することは出来ないんですね。何かそういう複数のやり方を持っていなければならない。ス

クーリングのない科目についてはそれを補うというようなことについても。なぜその科目にスクーリングがないのか、の選別が本当に出来ているのかどうかわからないのですけれども。これはスクーリングがなければ本当は駄目だというものもあるかもわからないですね、そういう所の検討もこれから色々試行錯誤をやっていかなければならないんですね。そういう時にはスタディガイドを加えて、どの辺をねらって学習したらよいのか、そういう、どうしても私はきめ細かい処置をやらなくてはいけない、予算がどうのこうのいうのは次の問題ですね、有料でもやむを得ないと思うのですね、第1段階としては。

大学生だって或学科に入れば、専門のことをきくために、何冊かの本を少なくとも買いますからね。1つではないですから。ですからそのことを考えて用意しておいたらいいのではないかという感じはするんですがね。

（小林）　補助教材は、普通ならば作るということになっています。

・スタディガイドはメインに

（天城）　要するにお金が要るというのは個人負担だから学生の方の問題なんですね。それはもう極端にいえば、勉強する以上は若干は負担して貰ってかまわないという所まで踏切らなければ、授業料を収めればあとは何でも来るというわけには行かないのではないかということですね。そういうことも一寸問題であるということです。

私は補助教材という意味と、スタディガイドとは一寸違うのではないかと思うのです。スタディガイドはむしろメインに入るべきものではないかと思うのですね。個別学習、孤独な学習者の立場からみると、非常に大きなウエ

イトを占めている。それをテキストの中に書き込まれて行くと、今度はテキストが書ききれなくなってしまうのではないかと思うのですね。こういう所を一寸、私の方からよりむしろ先生方がおやりになって、そこをどうお思いなるかとお聞きしたい所なんです。

（小林）　スクーリングを決めたのは最初の開学準備委員会のところで、次は部会で或程度決定したのですが、十分検討されたわけではないのですね。今後必要に応じて変えて行こうということです、先生の準備が要りますからいっぺんには変えられないんで、うまく段々と変えて行かなければなりませんね。

（矢部）　なんとなく自然系は実験があるからスクーリングがあった方がよいというような話ですが、実はあまりたいした実験はできないんです。それより先生と学生との交流とか、奈須先生のおっしゃったような学問の基本的姿勢とか、そういうようなフェースツーフェースの学習の機会になるんですね。

（小林）　スタディガイドの作成という所まで、中々どうもまだ皆さん行っていませんね。

・主任講師に直接質問出来る機会を

（若松）　ただ今スタディガイドの議論になっておりますが、その必要性は皆様十分お認めでございますが、まだそこ迄手が回りかねているというのが現状のようでございます。ここで、今日の主な話題となっておりますスクーリングとチュータリングの問題に戻らせていただきますが、そこでチュータリングでございますが、どうでしょうか、実際問題として出席率は非常に低

いのですが、とくにスクーリングの無いような科目につきましては、何らかの形でやはり質問したければ直接主任講師に質問できる機会を設けておくことは、必要ではないかと考えられるのですが、この点についてはいかがでしょうか。

（天城）　先生方とくに直接手紙とか電話とかありませんでしたか。

（異口同音に）　ありませんでしたね。

（佐藤）　年賀状の中に若干あるようでございますね。（笑い）

（複数）　ありますね。

（天城）　今、大学公開講座の中で、北大のラジオの番組は葉書質問を認めているんですよ。5回集まった時、生でやりましてね、頭の5分か10分位をまとめて質問に答えるということをやっているんですね。

・スクーリングの実施方法は

（平松）　あの放送大学の場合、大変学生数が多いわけでございましょう。そうするとそういう人達をスクーリングするのは大変じゃないかと思うんですね。

（山本）　1つの学習センターに毎日300～400人づつ収容出来ないと、面接授業は、さばききれないだろうということになります。

（平松）　例えば語学の場合はどういうことになるのでしょうか。

（山本）　これも難しい話で、結局担当される先生方をどの程度確保できるかによります。例えば中国語で先生が1人しか集まらなければ、1つの学習センターで30人しか面接授業が出来ない、2人集まれば60人位出来るかも知れない、まあこういう形になるかもしれないと思います。

（平松）　そうするとすれば、それは例えば中国語に限らずフランス語でもドイツ語でも、たとえば先着30人とか、そういうような形でやって行くというわけですか。

（山本）　そうですね、ただ、一つの教室の規模を30人位と考えているわけですが、もっと大教室でも大丈夫であれば、１人の先生で同時にもっと沢山の方にスクーリングすることが出来るのではないかということで、今考えています学習センターの教室には、一つだけ80人から 100人入る大きな教室も考えているんです。

それからＬＬ機能をもった設備を学習センターに作るということで、検討は進められています。

普通の通学制の大学の学部レベルの教育では、授業が終わった後学生から質問を受けられるそのパーセントはどんなものなんですか、質問してくる学生については？放送大学としても、質問と回答のシステムについては考えておかなければならないものですから。学生がどの程度質問して来るかで変わってくる可能性があります。ごく少数であればていねいに答えることももちろん出来るわけで、科目によっても違いますが。

（小林）　普通の大学と違って多いでしょうね、普通の大学ではほとんどないが。

（平松）　今回のスクーリングの度毎にアンケートを配ったんですね。質問事項があったら何でもよいからということも。そうすると実に幼稚な質問をしてくるのですね。ラジオの中でも言ったし、テキストにも書いてあることが質問に出てくるのですね。それは講義の学科ではないということもあるんでしょうけれども、何かこう語学を勉強する以前のことが出てくるんですね。

（小林）　先生の直接の科目よりは語学全体、あるいは語学にも関係がないのかも知れませんが、学習のやり方みたいなことで問答があるんですか。

（平松）例えば中国語の場合ですと色々な発音記号があるわけですね。戦前なんか勉強した人は今の発音記号を全然知らないわけですね。今の発音記号はローマ字で書いてますね、そうすると、一体中国では漢字を使っていないのかなど、そういうことなんかも、はしがきを見ればちゃんと出ているのに読んでないわけですね、中国は漢字を使ってないのかとかね。

・社会人は学習の仕方がわからない

・スタディガイドを

（小林）　まあそういうのだとまた一寸違うんですが。先程天城先生がいわれたようなチューターですね。或人数を受け持ってやっておればやはりそこで解決できるような、学習態度とか学習のやり方とかそういう指導をして行く必要性もあるんだと思うのですね。

（天城）　大学への社会人の入学で思い出すんですが、豊田工業大学というのが5年前に開学しましたが、社会経験2年以上の者を入学させるということで始めたのです。ここの最初の1年の経験は学習の仕方がわからない、高校を卒業して、受験勉強をやらず、すぐ就職しているので、学習の仕方がわからない。一学期はそれを習慣付けるのを全力でやらなければならない。全寮制なんですが、それが大変だといっていました。色々な広い層をねらっているので要らない人は要らないかも知れないが、スタディガイドが要りますね。

（田中）　一般的なスタディガイドを読んで、それから各教科毎のスタディ

ガイドが必要だと思いますね。

（小林）　そういうことが多かったのですね。私も或会社の夜間の専門学校で、高校卒で実業についた人の教育を5年位やりましたけれども、やはり講義はただやればよいのですが、ゼミがありましてね、大変なんですが、先ず勉強の仕方からなんですね。そういうことをやったんで、大変親近感を持っていましてね、今でも年賀状をくれたりしていますね。もうずっと前に止めていますけれども。

（天城）　私は副教材とかいうものではなくて、どうしても本教材として必要だと思いますね。

（矢部）　やはり学生となまに接してみると、学習センターを駆け歩いて話し合いたい衝動に駆られますね。講義をやりっぱなしにして、あとはその若いチューターにまかせておくわけにはいきませんね。（笑い）

（田中）　それは実際は大変だとは思うけど。（笑い）

・将来は大学院を

（佐藤）　先々ですね、大学院の問題はどういうお考えなんですか。全然問題にしていないのですか。

（矢部）　われわれは非常に問題にしています。

（小林）　将来持ちたいと思っているんですが。

（矢部）　最短距離で持ちたいと思っています。

（佐藤）　それは、これからどういう教育をして行くかを考える場合の基礎になりますね。大学院が出来ますと、後継者養成の問題が出て来ますね。教授がその中から出て来なければならない。おざなりの教養の講義のようなこ

とで終わらせてはいけなくなるわけです。

（田中）　本当に大学院を持てば、内容がぐっと変わって来なければならない。矢部先生のおっしゃった教養、名前はそれでよいけれども学生の研究能力を学部中に伸ばして行こうという、そういうようにカリキュラムを変えなければならない。

（佐藤）　天城先生、あの中央大学の法学部に通信教育がございますね。通信教育から学部へ入りましてね、それから大学院を出ましてね、非常に優秀なのがいるんですよ。ですからこれはやはり先々の問題ですね。

（天城）　私はそのために、余計なことかも知れませんが、私見としては、放送大学の大学院の企画の前に、非常にモチベーションの高い人達を中から探し出して、先生が個別指導をやるという実験をやるべきだと思います。その人達が先生の所へ来るという、研究室へ来るというのを先ず第１にやって行くべきでしょう。

（矢部）　そうでないと研究室が動かないですね。

（天城）　それにはね、例えば沢山外国にございますからね、ニューヨークのエンパイア・ステート・カレッジなんかでやっているコントラクト学習なんかがそれですね。指導教員は、メンターといわれていますが１人が20人位の学生をうけ持つんです。要するに学生一人一人に個別の学習の処方箋を作るんです。そういう形を徐々にやっていった上で、放送大学の大学院を考えないと。

（小林）　カリキュラムの最後に特論が各専攻にございましてね。この中から何かを引っ張り出そうということが考えられます。

（佐藤）　大学院迄参りますと、もう放送大学であろうが、全日制大学であろうが、区別はないんでございますよ。結局古い師弟の関係でございますか

らね。いかによく教授が学生の能力を伸ばしてやるか、学生がついて来るかの関係になるのですから。

（小林）　ＯＵにも大学院があるのですね。

（奈須）　私の親しい人の奥さんでＯＵで学位を取った人がいるのです。その奥さんに会いましたらとてもよかつたとしみじみ話していましたね。主人も胸を張ってわがワイフはＯＵで学位を取ったと･･･。

付記

昭和58年度前期大学放送教育実験番組に関する経過について

Ⅰ　放送期間；昭和58年8月22日～12月4日

受講生　；1504名（14科目　延べ2935名）

内訳　東京都　565，　千葉県　406，

神奈川県　229，　群馬県　155，

埼玉県　149，

Ⅱ　番組にともない実施したことがら

1　学習センターの開設

場所；　放送教育開発センター

日時；　放送期間中の火、木、土、日曜日、

火、木；13時～17時

土、日；10時～17時

利用者；　延べ180名（実人員89名）

1日平均3.05名

居住地は千葉県67.4%，東京都22.5%

利用の目的；番組の再視聴　82.2%

（内訳テレビ　31.9%，ラジオ68.1%）

学習相談　12.7%，　文献学習　5.1%

2　学習指導

（1）スクーリング；テレビ4科目、ラジオ5科目について各3回実施、出席率を表1に示す。

表1　スクーリング出席率（出席者数／母数　出席率%）

テレビ

科目名	第1回	第2回	第3回
衣生活概論	23/67　34.3	10/67　14.9	13/67　19.4
（千，神）	41/227　18.0	23/227　10.1	19/227　8.3
学校教育	19/55　34.5	17/55　30.9	14/55　25.4
（千，東，群，埼）	52/259　20.0	34/259　13.1	23/259　8.8
地球と宇宙	2/52　3.8	1/52　1.9	3/52　5.7
（群，埼）	29/219　13.2	16/219　7.3	15/219　6.8
ﾏｽｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ	19/68　27.9	13/68　19.1	14/68　20.5
論Ⅰ（千，東）	44/234　18.8	20/234　8.5	28/234　11.9

ラジオ

科目名	第1回	第2回	第3回
歴史の理論	14/59　23.7	10/59　16.9	10/59　16.9
（千）	25/215　11.6	16/215　7.4	13/215　6.0
ﾌﾗﾝｽ語ⅡA	4/30　13.2	3/30　10.0	2/30　6.6
（東）	29/163　17.7	20/163　12.2	14/163　8.5

産業と情報	5/28 17.8	3/28 10.7	3/28 10.7
(東)	24/176 13.6	16/176 9.0	16/176 9.0
中国語	13/51 25.4	8/51 15.6	8/51 15.6
(東,神)	43/216 19.9	25/216 11.5	20/216 9.2
現代の思想	6/55 10.9	5/55 9.0	5/55 9.0
(東)	26/202 12.8	17/202 8.4	17/202 8.4

上段は千葉県内受講生の平均出席率

下段は全受講生の平均出席率　　千;千葉　神;神奈川　東;東京

かっこ内は場所を示す　　群;群馬　埼;埼玉

（2）通信指導

全14科目につき3回実施、1,2回の回答率を表2に示す。

表2　通信指導回答率（%）

マークシート方式

科目名	第1回	第2回
衣生活概論	82.0	55.2
	72.6	54.6
現代政治理論	74.0	46.0
	59.8	48.6
生命のしくみII	68.6	50.9
	64.3	48.3
地球と宇宙	73.0	65.3
	68.0	59.3

歴史の理論	74.5 63.2	49.1 46.0
フランス語II	51.6 47.8	38.7 36.8
産業と情報	71.4 61.9	46.4 49.4
社会思想史	72.9 63.9	62.1 56.3
中小企業論	64.1 56.9	35.8 46.6

記述式

科目名	第1回	第2回
学校教育	43.6 25.7	
記号と人間	56.0 47.0	30.0 28.0
ﾏｽｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ論 I	54.4 45.7	45.5 35.4
中国語	58.8 52.7	41.1 39.3
現代の思想	16.3 19.3	18.1 18.8

上段は千葉県内受講生の平均回答率

下段は全受講生の平均回答率

全科目総平均	第１回	第2回
千葉県受講生	61.3%	45.1%
全受講生	53.1%	43.6%

（3）チュートリアル（個別的学習指導）

対象；　歴史の理論、学校教育、中国語、衣生活概論

場所；　放送教育開発センター

日時；　9月20日から11月29日までの毎週火曜日

（中国語は10月4日から、衣生活概論は毎週水曜日）

出席者延べ；　歴史の理論　4，　学校教育　2，

中国語　22，　衣生活概論　1，

（4）テレ・カウンセリング

対象；　歴史の理論、学校教育、中国語、衣生活概論、の千葉県内受講生（延べ232名）

時期；　第１回－放送第 4週中

第2回－放送第 9週中

第3回－放送第14週中

	継続者数（%）	中断者数（%）
第 4週時	184 (94.4)	11 (5.6)
第 9週時	143 (79.9)	36 (20.1)
第14週時	119 (72.6)	45 (27.4)

中断の理由；

第 9週時　a　難しくてついていけない

b　興味がなくなった

c　時間帯が悪い

d　申し込み動機安易

e　その他（交通事故、倒産、就職）

第14週時　a　時間帯が悪い

b　家事都合

c　難しくてついていけない

d　寒くなって

e　仕事都合

受講の動機（126中）

a	生涯学習	48（38%）
b	科目に興味	48（38%）
c	職業上	10
d	放送大学入学の予備	8
e	すすめられて	6
f	その他	

（子供の教育、テキストが欲しくて、など）

放送大学について（106中）

a	入学希望	60*
b	科目履修	28

c　全科履修　　10

d　期待している　　6

e　検討中　　2

※全科履修か科目履修かは決めていないが後者が多数と見られる

ビデオ装置（145中）

有　30　　無　115

※（昭和58年度前期大学放送教育実験番組にともない実施したスクーリング、チュータリング等に関する懇話会）

日時　　昭和59年1月10日　16時～18時

場所　　放送教育開発センター所長室

出席者

主任講師（50音順、敬称略）

阿部玄治（千葉大学教授，歴史の理論）

佐藤智雄（中央大学教授，マスコミュニケーション論Ⅰ）

奈須紀幸（東京大学教授　海洋研究所長，地球と宇宙）

平松圭子（大東文化大学助教授，中国語）

深谷昌志（放送大学教授，学校教育）

矢部章彦（放送大学教授，衣生活概論）

放送大学

小林靖雄（副学長）

岡　行輔（教務部長）

山本真一（教務課長）

放送教育開発センター

天城　勲（所長）

田中正吾（教授）

阿部美哉（教授）

若松　茂（教授）

今川庄造（総務課長）